

研究発表 1

道徳的直観のメカニズムについて

橋本 浩和

<研究の目的>

道徳とはいったいなんなのか。この問いは古くから存在し、長い間哲学的な研究がなされてきた。だがここ数十年の間で、意識的な内省を超えて、神経生物学や行動科学など、道徳判断の直観的な側面にかんする研究がさまざまな分野からなされるようになった。一方で、人工知能研究の分野では、人間の直観的な情報処理メカニズムを考える上で有用なコネクショニズムという立場が存在する。本研究では、こうした研究が明らかにしている道徳的直観のメカニズムを整理し、コネクショニズムの観点から統合的に捉えなおすことで、われわれの道徳的直観がどのようなメカニズムになっているのかを明らかにすることを目指す。

<発表内容>

道徳的直観のメカニズムを考えると、その生成（直観能力の行使による判断の形成）と学習（直観能力の獲得）の二つの側面を考え、その基盤となるシステムを明らかにすることが重要である。本発表では、道徳的直観のメカニズムを論じている四人の代表的な論者(Sunstein, Haidt, Gigerenzer, Narvaez) の説を Narvaez に重点を置いて吟味しつつ、それらを総合し、コネクショニズムの観点からの考察を加えて、道徳的直観のメカニズムの全体像を描き出す。

まず、Sunstein の主張する「間違いをひきおこすヒューリスティクス」という概念を取り上げながら、われわれの道徳的直観が道徳的なヒューリスティクスであるような例を挙げ、倫理理論とヒューリスティクスの関係性などを論じる。つぎに、Haidt の社会的直観モデルと道徳基盤理論を取り上げる。ここでは、われわれの行う推論はしばしば直観に対して後付け的になされる正当化でしかないということ、そして、そうした直観や推論を社会の中で共有し、社会的に意味づけていくことで徳や道徳的直観が形成されることを示す。第三に、Haidt のモデルと理論を取り込んで議論を展開する Gigerenzer の「すばやくかんたんなヒューリスティクス」という概念の検討を通し、われわれの判断能力の有限性や、熟慮的に見える判断もしばしばヒューリスティックに行われているということを示す。第四に、Narvaez の主張する理論により、進化的に異なる三つのシステムが相互作用しながらわれわれの価値のシステムとして機能し、道徳的な性質を特徴付けていることを示す。また、そうした基盤に基づいてより熟練されたスキーマを獲得することにより、われわれは道徳的直観を学習し、洗練させていくことを示す。一方で、推論の役割や、それを実現しているメカニズムについていくつかの議論が存在し、そうした中でスキーマなどの概念をより精緻に定義する必要性が明らかになる。最後に、これまでの議論の中で関係性や詳細なメカニズムがあいまいになっていたスキーマやヒューリスティクスなどの概念をコネクショニズムの観点から整理し、これまで議論されてきた道徳的直観の特徴や性質を実現する情報処理メカニズムとして、並列分散処理モデルが説得的であるということを示す。

結論として、道徳的直観の生成メカニズムは、Narvaezの示したシステム上のニューラルネットワークの調整に基づいた、並列分散的な情報処理やホルモンバランスの調整で実現されている。また、道徳的直観の学習メカニズムについては、このシステムの情動的機能に導かれながら、社会との相互作用の中でニューラルネットワークをさまざまな形で調整し、ヒューリスティクスやスキーマ、徳などを獲得し、熟練性を高めていくことで実現しているといえる。

研究発表2

「人格」概念と「人間の尊厳」

小椋 宗一郎

本発表における問いは次のものである。「カトリック教会などが主張する『人格の尊厳』は、国際法やドイツ基本法の規範としての『人間の尊厳』とは異なるか?」。結論から言えば、本発表は「異なる」と答える。「人格の尊厳」と「人間の尊厳」の違いは、古代から中世を通じて形成されてきたヨーロッパの人格概念と、その伝統を受け継ぎながらも近代思想と現代史による転換を経て生み出された「人間」概念との差異を反映している。実践的観点から言えば、生命倫理の問題をめぐるヴァチカンの声明と、ドイツ連邦議会「法と倫理」審議会における議論とにおける根拠付けの違いにも結びついている。

周知のように、ヨーロッパにおける人格概念の歴史はラテン語の「ペルソナ」へと遡る。ペルソナは仮面や劇中人物を表し、また早くから社会的意味での「役割」の意味をもっていたようだ。この意味圏が一挙に拡大されたのはキケロの用法においてであり、「法律の主体および対象としての個人」や「社会的役割」、また「個人の人格や具体的性質」などの意味が加えられた。ところが、キリスト教における三位一体論をめぐる論争史において、「役割」や「性質」などの含意を持つ言葉とは全く異なる概念が必要とされた。一なる神が三つの「仮面」や「役割」を使い分けしていると説明するならば、キリストや聖霊の独立性が否定されてしまうためだ。その際に大きな役割を果たしたのは「ヒュポスタシス」というギリシア語であり、神の「位格」としてのペルソナは、それぞれ別個の存在でありながら同時に神としての実体を共にすることを含意する概念へと発展した。現在でも、英語における「パーソン」にはキケロなどに見られる意味の影響が大きいのに対し、ドイツ語の「ペルゾーン」にはキリスト教思想が色濃く反映されている。ドイツの哲学者シュペーマンの著作を手がかりに、キリスト教思想の伝統に連なるドイツ語の人格概念の意味を明らかにしたい。

ところが、現代生命倫理における「人格」概念をめぐる議論は、英米の「パーソン論」からカトリックの「人格主義」に至るまで、様々な立場が乱立した混乱状態にある。ヴァチカンの声明は、伝統的な人格概念に「現代遺伝学の成果」を援用することによって、ヒト胚が「人格」であると主張する。これに対してドイツの審議会は、近代社会の「多元主義」に基づいた「人間の尊厳」を規範としている。そこでは「人格」論争に対して距離をとることによって、一定の社会的合意が形成されていることを指摘したい。

特別研究報告 1

西洋思想における否定神学の成立と展開

今 義博

20 世紀後半から 21 世紀にかけて、否定神学は現代の哲学者たちの注目を集めてきた。その背景には、理性や実存によって人間精神や社会構造を説明できるという立場が疑われるようになったことがある。ジャック・デリダや構造主義者、ポスト構造主義者と呼ばれる哲学者たちは、世界は確固たる中心があるのではなく、むしろ中心の欠如によってしか構造化されないとし、否定神学的なモデルによって世界を説明しようとした。現代ではフランスの哲学者 J. -L. マリオンの否定神学への傾斜はホットな話題になっている。

またハイデgger、オイゲン・フランク、ヴィットゲンシュタインというような現代の哲学者たちの思想が皆、否定神学と深いつながりを有していることも、否定神学が現代哲学の主要テーマの一つとなった理由である。

しかし近年、否定的表現の困難さもあって、否定神学は乗り越えられるべき古い立場であるという主張も現れてきている。否定神学に対する一種の揺り戻しであろう。

しかし、世界的に見ても、肯定にせよ否定にせよ、否定神学に関する今日の議論は十分に正しい知識や理解に基づいているのかどうか疑問である。ことにわが国には否定神学の研究の蓄積は皆無に等しく、残念ながら、否定神学の正しい理解が得られているとは思われない。

そのような背景から私は西洋思想における否定神学の起源、成立、展開の歴史をひもとく作業をしつつあり、今回の発表では西洋思想における否定神学の源流を旧約聖書（ユダヤ教）、古代ギリシャ哲学、古代ユダヤ教神学・哲学（アレクサンドリアのフィロン）、グノーシス主義、キリスト教神学（パウロ）に見て、その後、中期プラトン主義を経て、新プラトン主義、さらにその影響下に成立した偽ディオニュシオス・アレオパギテスの否定神学の概要を見てみたい。

特別研究報告 2 -

北欧ケアの社会的基盤と思想的拠り所 ～日本社会におけるケアの再構築のために～

竹之内 裕文

報告者は 2011 年 4 月から 2012 年 4 月まで、一年間の在外特別研修の機会を得て、スウェーデンのボロース (Borås) 市で生活した。客員教授として研究の拠点としたボロース大学健康科学部では、同僚教員や大学院生たちとの討論を通じて、「北欧ケア」について理解を深めた。またスウェーデンの著名な医療・福祉機関を訪問し、ケア専門職と討議を重ねた。さらに医療、福祉、教育、環境、農業、宗教など多岐にわたる論点について、スウェーデン国内外の研究者たちと論じ合った。

在外研究の拠点としてスウェーデンを選んだ理由のひとつは、科学研究費 (基盤 B) による共同研究「北欧ケアの実地調査に基づく理論的基礎と哲学的背景の研究」(研究代表者・浜渦辰二) を遂行することにあつた。もう一つの理由は、北欧社会における終末期ケアと障害者福祉の現状を自分の眼で確かめてくることにあつた。報告者はこの十年間、在宅緩和ケアとの連携に基づく死生学研究に従事し、また学生時代より、重度障害者の自立生活にボランティアとして携わりながら、哲学・倫理的な思索を練ってきたからである。

今回の特別研究報告では、北欧社会の障害者福祉・運動を支える人間観に注目しつつ、北欧ケアの根本理念に迫り、その社会的基盤と思想的拠り所を究明する。脱施設、社会参加、個の尊厳、自己決定、平等、民主主義など、北欧ケアを特徴づける諸理念は、さしあたり障害者運動とともに確立されてきたという見通しが立つからである。

たとえばスウェーデン社会では、すべての市民を対象として、住宅政策、教育政策、男女共同参画社会づくりの政策を統合した「包括的福祉」が、社会的合意のもと進められてきた。「包括的福祉」は、社会サービス法 (1982 年施行) に謳われるように、一方で「民主主義と連帯の観点から」、他方で「個人の自己決定とプライバシーの尊重を基礎として」発展してきた。

「連帯」と「自己決定」という理念は、しかし、一見したところ相互排他的な関係にあるように映る。両理念を支える思想的土台と社会的基盤はいかなるものなのか。この問題は、報告者の見通しによれば、「福祉」の原義 (well-being) に照らして、また世界に住まうという人間の根本的なあり方を視野に収めて、初めて展望が描かれる。

以上の論究は、医療と福祉の分断、ケアと自己決定の相克など、ケアをとり巻く日本社会の諸課題にも新たな光を投げかけてくれるはずである。このような見通しのもと、本研究報告では、北欧ケアの社会的基盤と思想的拠り所を究明し、そこから日本社会におけるケアの再構築のための糸口を獲得する。

南方熊楠と神社合祀

芳賀 直哉

南方熊楠（1867~1941）は一般的に民俗学者・生物学者として知られるが、いまから 100 年前に“ecology”を“植物棲態学”として紹介し、この文脈から自然保護運動を行った人物としても有名である。20 世紀初頭の欧米で認知されつつあったこの「エコロジー」なる学術用語を、熊楠は神社合祀反対運動の文脈の中で紹介している。かれの住居した和歌山県や隣県の三重県下では、神社合祀政策による神社境内森林の伐採が強制的・画一的に行われた結果、数年間に神社数が激減した。熊楠にとって神社境内や森は研究対象である粘菌の生息場所すなわち研究フィールドであったから、神社の激減は死活問題であった。

ひろく自然保護活動という観点からみれば、1890 年代以降の足尾銅山による渡良瀬川流域村の鉍毒被害とこれの救済に奔走した田中正造について、日本初の公害防止住民運動であったとの評価が定まっている。また、1909 年以降の南方熊楠による神社合併反対運動を日本におけるエコロジー運動の先駆とする鶴見和子の説がある。わたしも大筋においてこの考え方を支持するものであるが、熊楠はいわゆる「エコロジスト」かと問われれば、必ずしもそうだとは言えないのである。

生命論の課題として、自然と人間との関係を根源的に変革する思想としての新しい環境哲学が求められているのではないか。その意味で、存在の全体的救済と解放の思想となりうるエコロジー思想はいかにして可能であるかを、南方熊楠の思想と活動のなかに問うてみたいのである。

かれは、いのち、自然、宗教、社会制度までを大きな生ける生態系のそれぞれの連鎖にとらえ、その大きな連りの系のどのひとつを欠いても他の全てがそれとして働かなくなるとみていたという点で、かれの示唆は今日のさまざまなエコロジー運動に何らかの理論的統一を与えようからである。

かれは、何より「ナチュラリスト」であった。民俗学上のおびただしい数の論文、植物学の研究、自然保護運動、いや、南方熊楠の生存したいが一個のナチュラリストの活動としてあった。これら諸領域の知と実践はバラバラに存在するのではなく、壮大な連鎖のひとつひとつとして統一ある全体を成していると言うべきだろう。かれ自身が一個の生命生態系である。数々の奇行を半ば伝説的にもつこの異彩のひとは、また「ヒューマニスト」であり、感激癖のつよい「ロマンティスト」でもあった。1929 年の、天皇に対する進講の折のエピソードなどは、明治人特有の立居振舞であったとしても、南方のロマンティストぶりがよくあらわれていると言うべきだろう。

「ナチュラリストにしてヒューマニスト」という形容は、熊楠に対してのみ付けられる特性ではないにしても、かれほど自然と人間とが一個の人格のうちに隔合している例は稀である。

熊楠の専門とする学問分野は粘菌分類学であるが、かれを有名にしたのはむしろ非専門的業績であり活動である。かれには、専門非専門の別はなかったと思う。かれの知的関心は全領域に通じていたから、ひとつの狭い分野での知見はそのままで全体知の一部をなす知でありえた。全体

知へと至ることのない専門的知見が科学であるとするなら、かれは非科学者である。この意味で、かれは非生物学者であり非宗教学者であり、非民俗学者である。にもかかわらず、かれは、あらゆるものに通じ、あらゆるものから発する全体知を生涯かけて探求したという意味において、「世界的大学者」でありえた。この特異な人物の思想と活動の一端を、その時代背景とともに紹介する。